



ちょっとそこまで～お散歩日和(名言編)～



読書のコツは… ハマトン



読書のコツは、賢明な飛ばし読みにある。…… P・G・ハマトン



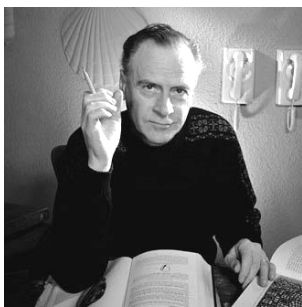
読書ほど楽しいものはないと思うから、これまで長きに渡って、担任する子供たちにそのきっかけを作ろうとそれなりに取り組んできましたが、今はもうすっかりその気は失せてしまいました。余りにも虚しい作業だからです。恐らく子供たちの読書嫌いの理由は、私がテレビ・ゲームに全く興味を示さないのと同じなのだろうなと思っています。私はテレビ・ゲームを面倒臭いと思うし、楽しいと思ったことは一度もないし、自分の人生を豊かにするものとして到底受け入れられないからです。子供たちの、読書に向き合う感情と方向性が真逆だけで、ほとんど同じ心情ではないかと想像します。

もちろん、読書好きな子はそれなりにいますが、その子たちは私が介在しなくても十分に読書好きになっていますから、そこに私の存在理由は見当たらないと思っています。

さて、冒頭の言葉をどう考えましょうか。

高校時の国語教師が、名作文学の粗筋だけをまとめた1冊の本を教室にもってきて自慢したことがありました。詳細は覚えていませんが、「こいつ馬鹿じゃねえ?」と思ったことだけはよく覚えています。

しかし、今にして思うと、この教師の心境が分からなくはありません。読みたいと思う本はたくさんあるのに、時間が追い付いていかないのです。結局、図書館から借りてきても読まずじまいで返却するという事は日常的な事です。ある意味、読書は多分に気力の問題でもあるのです。具体的な必要や動機があるときは早く読めるのに、のんびり読み出した本はなかなか捗らないというのがその典型です。



恐らく、あの時の高校教師は生徒に教材として指導すべき文学作品が膨大にあるにもかかわらず、読み切れていない自分に劣等意識を感じていたに違いありません。自分なりにダメ教師になりたくなくて足掻いていたのでしょう。そう思うと、意地らしく思えてきますから不思議なものです。

ところで、カナダの文明評論家マーシャル・マクルーハンが、メディアを「熱いメディア(ホットなメディア)」と「冷たいメディア(クールなメディア)」に区別したことはとても有名です。

- ・熱いメディア……単一の感覚を高精細度で拡張する、情報量の大きいメディアで、受容者が情報を補完したり情報交換に参加したりすることが少ないもの。写真・ラジオ・映画など。
- ・冷たいメディア……単一の感覚を低精細度で拡張する、情報量の小さなメディアで、受容者が情報を補完したり情報交換に参加したりすることが多いもの。漫画・電話・テレビ・会話(話し言葉)など。

分かったようで分からない分類法ですが、ここで触れたいことは、「二度見」が有効かどうかで両者を分けると見えてくるものがあるということです。例えば、感動した映画があったとします。恐らく2度目3度目と続けても、その度ごとに新しい発見に満ち、また違った感動に浸ることができるはず。これが「熱い」と称する理由です。それに対して、一度交わした会話を再度繰り返したいとは思わないはず。ボイスレコーダーで記録した原稿を書き起こす作業ほど虚しく疲労感が増すものはあ

りません。感動した小説もそうではないでしょうか。いくら良かったとの感想をもったとしても、何度も繰り返して読む気にはなりません。だから「冷たい」のです。

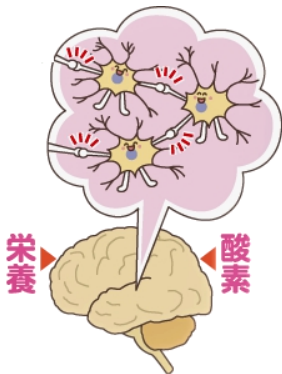
ところが、同じ読書でも専門書となると様相が変わってきます。何度も繰り返し読まないと内容を理解できないばかりか、何らかのメモを取らないと全体像を把握できない事態になります。これは明らかに「熱い」症候でしょう。

さあ、やっとここで私の本意に触れたいと思います。読書は楽しい。しかし、もっと楽しいものにするために「二度読み」をお勧めしたいということです。1度目はざっくりと。そして2度目にじっくりと読むのです。私の場合は、アウトライン・エディタを使って、1度目に読んだ本の中から心にフックしたものを書き出していきます。文章量が多い場合はスキッピングします。何も考えずに、とにかくどんどん書き出します。読み終わったら、これで1冊の読書ノート完成です。それから、やおら、2度目の読書を開始するという具合です。これが私の読書術です。数多くの引用が可能なのもこのためです。



「私という人間は今まで読んだ本を編集してでき上がっているのかもしれない。逆にいえば、本によって編集されたのが私なのだ。」

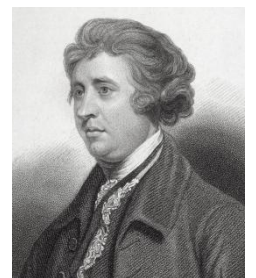
とは、資生堂の名誉会長でもある福原義春氏の言葉です。そうかもしれないと思う節が数々あります。しかしその一方、私たちにとって「読んだ」と自信をもって言える本がこれまでに何冊あるというのでしょうか。そのほとんどは「賢明な飛ばし読み」によるものではないか、そう思えて仕方ありません。「二度読み」の勧めとともに、読書に際して頭の隅に置いておいても良い言葉だと思えます。



このように、人から話を聞いたり、本を読んだりすると何かを知ることが出来ます。でも、「ふーん」とか「へえ？」と感心しつつも、そのまま素通りしてしまうことがほとんどです。その時に一旦立ち止まって、もう少し掘り下げてみようとか、いや、そもそも自分は どうして「ふーん」や「へえ？」と肯いたのだろう、などと反芻してみることは滅多にありません。

「考えない」のは「学ばない」のと同義語ではないでしょうか。それは、ご飯を食べるのと同様で、「考える」ことは脳にとっての栄養源を与えているとも言えると思えます。考えなければ「頭」は栄養失調になってしまうからです。

食事の時に、「何度もしっかり噛んでから食べなさい。」とはよく言われる言葉です。牛は4つある胃で消化しやすくなるよう、食べたものを口に戻してはまた飲み込むことを繰り返します。これを「反芻（はんすう）」と言います。同じように何度も繰り返し考えることで、言葉の意味が整理され理解でき、やがて体に馴染んでいくのです。



「書を読んで考えないのは、食べて消化しないのと同じだ。」（エドモンド・バーク）

深く考えようとはせずに、ちょっとかじったことを、さも知った気になり理解したと勘違いして、それで良しとしているのは、自らの血となり肉となっているとは言い難い状態です。私は、勉強とはそれでは不十分だと思っています。面白さと苦しさは表裏の関係なのです。



そういう意味からも、「二度読み」を是非ともお勧めするのです。最後に丸谷才一という言葉で締めくくりといたしましょう。

「面白い本を読まなければならない。つまらない本をねじり鉢巻きして読むから読書が面白くなくなる。面白くなるためには、自分が不思議だなど思うことをたくさん貯めることだ。」

（終）